

令和5年4月8日

お客様各位

J Aいがふるさと旅行センター

TEL : 21-3180

「四国巡礼の旅 説明会資料」

1、 四国八十八箇所について

四国八十八箇所は、四国にある空海（弘法大師）ゆかりの88か所の仏教寺院の総称で、四国霊場の最も代表的な札所である。他に「八十八箇所」「お四国さん」「本四国」などの呼称がある。四国八十八箇所を巡礼（巡拝）することを四国遍路、遍路といい、また四国八十八ヶ所霊場会では「四国巡礼」といい、他に「四国巡拝」などともいう。時代の流れにより、現在の宗派は真言宗80ヶ寺・臨済宗2ヶ寺・曹洞宗1ヶ寺・天台宗4ヶ寺・時宗1ヶ寺です。

2、 旅行当日の服装・持ち物について

服装

（一社）四国霊場会からの案内では金剛杖・白衣・輪袈裟は最低限準備をするようにご指示を頂いています。

動きやすい服装と履きなれた靴（スニーカーなど）・雨具をご準備ください。

持ち物

白衣・金剛杖・輪袈裟・念珠・線香・ローソク・ライター・経本・納め札・賽銭

3、 参拝方法について

(ア)お寺に入る際、山門の前で手を合わせて一礼をします。帽子は脱帽してください。

境内や階段・参道は原則左側通行です。

（参道の真ん中は神様が通る。左右どちらかに寄るのは、手水場のある方とする一説もあるようです。右側通行を指定している寺もありますが特に指定のない場合は左側通行となります）

(イ)山門をくぐり手水場にて手を洗い・口をすすぎます。

その際、ひしゃくに口をつけてはいけません。一度ご自身の手にとってからすすぎてください。衛生上、水が流れていないときは手のみ清めます。

(ウ)釣鐘を鳴らす場合は到着した時をお願いします。帰りに突く事は縁起が悪いとされています。(突けないお寺もあります。)

出鐘(金がでていく)また、戻り鐘「昔、京都では流行り病で多数の死者がでました。鐘の合図で死人を清水寺へ送っていた際に近くの民家の人「病で亡くなった死者を見たくないため」鐘が聞こえると家に戻ったといわれている。

(エ)先に本堂で蠟燭1本・線香3本を立てます。火は必ずご自身でつけてください。

ろうそくは奥から、線香は中央に3本まとめてください。(次の方へのご配慮)

多数の参拝者が訪れています。他の参拝者の迷惑にならないよう、賽銭箱・蠟燭たて、線香たて・納め札入れ・写経置き場等で立ち止まらずにお供えが終わりましたら次の方へお譲り下さい。

蠟燭・線香をご自身で付けるのは、他の方の「ほのお」は「煩惱」を貰い受けるといわれるため。また、線香に直接ライターで火をつけるのもマナーが悪いといわれています。

線香3本の意味は三宝「仏・法・僧」や「現在・過去・未来」等の意味があるようです。蠟燭たて・線香たてへの納め方は次の方がお参りしやすいような配慮です。

(オ)納め札・写経は所定の箱におさめます。住所は番地まで書かないでください。

納め札へは予めご記入をお願いします。(氏名・お願い事)

日付は、参拝日でも〇年〇月吉日でも結構です。

納め札入れは誰でも手を入れて持ち帰ることが出来る(本来はマナー違反です。)

住所を番地まで記入すると思わぬ高額なDMが届く可能性があります。

三重県伊賀市や三重県名張市までで止めてください。

トラブルをふせぐためご理解下さい。

写経をおさめられる方は、所定の場所がありますので専用の台へお願いします。

(カ)お賽銭は遠くから投げずに静かに添えるようにいれます。

お賽銭の金額にきまりはありません。お気持ちを出発前にご準備ください

(キ)勤行次第・教本を見ながら読経を唱えます。

詳細の「佛前勤行次第」は全員にお渡しします。バス車内にて安全祈願の朝のお勤めを含めて読経します。

(ク)本堂のお勤めが終わりましたら大師堂へ移動し、本堂と同様に蠟燭・線香・納め札
お賽銭・読経を唱えます。

(ケ)山門を出る時に合掌1礼をします。帽子は脱帽してください。

4、巡礼順番について

昔は木製の札を打ち付けていた事からお参りする事を「打つ」といいます。

1番から回るルートを順打ち。88番から回るルートを逆打ちといいます。

必ずしも1番から順番に巡礼する必要はありません。

四国を一県づつお参りする事を一国参りといい、今回は大まかに一国参りの予定です。ただし、時間的な余裕があれば、少しでも先に行く予定です。(土佐～伊予)

5、先達について

先達とは同行二人の教えを核とする弘法大師信仰を拠りどころとして、四国を巡拝し、一人でも多くの人をこの道に誘い、それらの人々の指導者として、あるいは模範として、信仰修行に勤める方です。また、道案内やその他、巡拝道や札所寺院に関わる知識を身につけ、適切な指示や助言も行います。四国 88 霊場は 4 回・別格霊場は 3 回巡礼しないと公認先達にはなれません。

今回は伊賀市在住の真言宗の住職様に先達をお願いしております。

(住職様の都合により、四国霊場会公認先達様をお願いする場合もございます)

バスには、添乗員・バスガイドも乗務いたします。

6、巡拝用品の販売・購入について

現物をご覧いただき、別紙の「巡礼用品申込書」に、購入する用品の数量・金額をご記入の上、ご提出ください。(納品後にご請求させていただきます)

7、お納経について

当日、添乗員が代行でいただきます。

スタンプラリーではありません。お寺さんによっては、参拝後でないとご朱印をいただけない場合もあります。

白衣@200円・帳面@300円・軸500円(菊紋別)・カラー御影@200

お納経についてはお一人様一つずつとさせていただきます。(白衣・帳面・軸)

納経所は7:00~17:00(原則昼休憩はありません)

8、その他

お接待について

四国に住んでいる方がお遍路さんへお菓子や飲み物をほどこしてくれる四国独特の文化です。原則、お接待は断ってはいけないとされています。

河野衛門三郎について(四国遍路の開祖)

むかし、伊予国を治めていた河野家の一族で、浮穴郡荏原郷の豪農で衛門三郎という者が居た。三郎は権勢をふるっていたが、欲深く、民の人望も薄かったといわれる。あるとき、三郎の門前にみずぼらしい身なりの僧が現れ、托鉢をしようとした。三郎は家人に命じて追い返した。翌日も、そしてその翌日と何度も僧は現れた。8日目、三郎は怒って僧が捧げていた鉢を竹のほうきでたたき落とし(つかんで地面にたたきつけたとする説もあり)、鉢は8つに割れてしまった。僧も姿を消した。実はこの僧は弘法大師(空海)であった。三郎には8人の子がいたが、その時から毎年1人ずつ子が亡くなり、8年目には皆亡くなってしまった。悲しみに打ちひしがれていた三郎の枕元に大師が現れ、三郎はやっと僧が大師であったことに気がつき、何と恐ろしいことをしてしまったものだと後悔する。

三郎は懺悔の気持ちから、田畑を売り払い、家人たちに分け与え、妻とも別れ、大師を追い求めて四国巡礼の旅に出る。二十回巡礼を重ねたが出会えず、大師に何としても巡り合い気持ちから、今度は逆に回ることにして巡礼を続けた。「いわゆる逆打ちのはじまり」です。その途中、阿波国の焼山寺近くの杖杉庵で病に倒れてしまう。死期が迫りつつあった三郎の前に大師が現れたところ、三郎は今までの非を泣いて詫びた。大師が「望みはあるか」と問いかけると、三郎は「来世には河野家に生まれ変わり人の役に立ちたい(石手寺刻版には「伊予の国司を望む」)」と託して息を引き取った。大師は路傍の石を取り「衛門三郎」と書いて、左の手に握らせた。天長8年10月(石手寺刻版では天長八年辛亥のみ。杖杉庵縁起では天長8年10月20日。)のことという。翌年、伊予国の領主、河野息利(おきとし)に長男の息方(おきかた)が生まれるが、その子は左手を固く握って開こうとしない。息利は心配して安養寺の僧が祈願をしたところやっと手を開き、「衛門三郎」と書いた石が出てきた。その石は安養寺に納められ、後に「石手寺」と寺号を改めたという。石は玉の石と呼ばれ、寺宝となっている。

その他の伝説(十夜ヶ橋・御厨人窟・文殊院・杖杉庵・八ツ塚・捨身ヶ嶽禅定など)本四国遍路の道中立ち寄りを予定しています。内容は、先達様・バスガイド・添乗員からご案内をします。